

二〇一〇年四月二〇日(参加者一八名)

若葉風通ふ堂縁去りがたく わかば
 杜若 由緒 札立つ心字池 " "
 老鷲や寺苑の森の奥深し " "
 青銅の伽藍包みて夏木立 " "
 鐘楼に新樹の影の揺れやまず " "
 牡丹の火照りをさます日照雨かな うつぎ
 正直に生きて息災菖蒲風呂 " "
 シャンソンをうたおうかしらリラの雨 " "
 軍港の湾真つ平夏燕 " "
 早苗田の風の漣絶ゆるなし こすもす
 と見る間に舟虫岩に隠れけり " "
 よく廻るペットボトルの風車 " "
 山藤のてっぺんよりの屑こぼる 小袖
 船頭の片方寡黙風薫る " "
 石垣を映し代田の静まれり " "
 廃校の門に散り敷く桜蕊 菜々
 楠若葉朝臣の墓の天蓋に " "
 玉砂利のひとつひとつに若葉影 " "

めざす寺意外に遠し道薄暑 つくし
 遠足の子に一喝の笛が鳴る " "
 新緑に閉じ込められし山の寺 有香
 竹の秋獣害かこつ老農夫 " "
 聞えくる婚の賛美歌窓若葉 宏虎
 明日香路や眼を洗ふごと柿若葉 明日香
 天つ藤ゆらぎて過ぐる山の風 よし子
 ひと色の緑であらず夏迎ふ 綴
 四囲の森映す川面の緑濃し 満天
 ひらひらと峡の日返す柿若葉 "

定例句会みの選

二〇一〇年四月二〇日(参加者一八名)